

農業体験学習に参加する大学生と受入れ農家のニーズの違い The difference of the requirement of the farmhouse and College student participants to the agricultural experience program

下 平 佳 江 Yoshie SHIMODAIRA
加 藤 麻 樹 Macky KATO

Abstract: Introduction of volunteer into agriculture cannot less as one of the method to support farmers who have few workers because of aging in the mountainous area. Sometimes government in the area can secure people for the farmers who need man power. On the other hand, people who want to help farmers may need concrete information such as transportation to the farm area, detail of the job, equipments, job fee, and the farmers personal information, and so on.

If there is chance, many university students want to participate in the agriculture experience program. Most of them had done some farm job in junior school. In fact, the farm job in warm and humid weather makes them tired, however many students think about the farm job positively. Activation of agriculture will be possible if we can place them to the farm area. In this study, we investigate the farmers' requirement and the students' one to the agricultural experience program. Matching of both of them will be one of the condition to establish the man power secure system.

Key words: Agricultural volunteer, Agricultural experience, College student, Requirement, Matching, Information

1. 背 景

高齢化や後継者不足に伴い、農業規模を縮小したり農業を辞めざるを得ない農家が増え、過疎地域の荒廃地が増加している。¹⁾ 農村の生活基盤であった田畑の荒廃化を防ぐために、蕎麦や大豆を転作したり、農業を継続できなくなった農家から土地を借りて栽培を続けようとする農家もある。耕作面積が拡大する一方で農地が複数個所に点在すると、栽培や移動などの面で効率が良いとは言えない。²⁾ 特に中山間地域では大型の農業機械が使えないため、人手に頼らざるを得なく、農業ボランティアなどによる農作業の支援を必要としている農家が多い。平成20年度から農業に関心のある若者や退職した団塊世代、就農希望者などの参加を想定して援農ボランティア事業を開始した静岡市のように、自治体が窓口となって都市在住者による農業体験学習や農業ボランティアを導入する試みも始まっている。³⁾ 稲作では田植えや稲刈りなどの繁忙作業時は通常

時よりも人手を増やして実施することもあるが、高齢化や過疎化などで支援者が確保できない状況が発生することもある。またこうした作業だけを機械組合に委託する制度もあるが有料のため利用できずに稲作を辞めてしまう農家もある。これに対して農業ボランティアの場合は無報酬が原則であるので、この制度が広く定着すると身体的・金銭的負担を軽減できる農家が増えると思われる。

一方で、都市部から農村に来て農作業を手伝いたいと思う人の参加目的は、実際の農家で農業を習いたいという本格志向の人から、自然環境が豊かな場所でゆったり過ごしたいという人まで、かなりの幅があると思われる。これまで農業体験を受け入れてきた側でも、参加者の目的が必ずしも農家側と一致しないことに気付いている。

例えば、都市部の小中学校による農村スティは、農業に興味のない子供も参加させられることから、滞在中は持参したゲーム機を相手に過ごしていたり、夜遅くまで友達と騒いで過ごすということもある。

宿泊と食事を提供している農家にとっては、農作業の手伝いを期待しながらも、一日は周辺観光にあたり、大勢の食事や身の周りの世話を大変と思いつながら続けているのは、農作業補助よりも都市住民との交流的意味合いを大事にして対応してからである。しかし近年は、受け入れ農家の高齢化も理由となつて、小中学生の受け入れを断るケースも出てきている。

また、棚田オーナー制度を導入した地域では、日本の原風景とも言われる水田で毎年田植えと稲刈りに訪れる都市在住者を目にする機会が増えた。日常生活にとって欠かせない食料の生産現場である農村が、高齢化や人手不足により生産能力が著しく低下している現状が少しでも改善できるよう、多くの都市在住者が気軽に農村を訪れて農業体験をしながら農業に関わる機会を提供することは社会的にも意義のあることと言える。

そこで、農作業支援者の確保を願う農家と、農業体験を希望する都市在住者のニーズを明らかにし、それらを調整して、双方にとって継続しやすい交流システムを作ることが農業や農村の活性化に寄与すると考えられる。

2. 目的

中山間地域の農業に関心をもつ東京農工大学の協力を得て、2008年度より1年生の農業体験実習を長野県中条村にて実施している。初年度は、昼間は各農家に数人ずつ分かれて農作業実習を行い、夜は村内の宿泊施設を利用して、村の長老による農業の変遷の紹介や種子名あてクイズなどを実施し、翌日は棚田保存会と合同で田植えをするなど、イベント色が濃い楽しい体験実習となった。反面、農家からは農作業にあてる時間が少ないという反省もあり、2009年度は、農家へ分宿して各農家の組んだスケジュールで農業体験を行った。

農作業の手伝いや長期的な交流を期待して実習を受入れる農家の要望とは異なり、農業体験に参加した学生の要望は農作業だけではなく過疎地域の現状を知ったり豊かな自然を味わいたいなど多様化しており、体験実習の意味を農家の人に理解してほしいという希望も出ている。

したがって、援農を望む農家と農業体験に参加する学生の要望をそれぞれ明らかにして、それらをマッチングさせる必要性は高いと言え、農業体験を継続的な事業にすることは、人手不足に嘆く過疎地域にとって援農人材を確保するために重要なプロセスであると考えられる。

本研究では、都市在住者による農作業支援体制作りを目的に、農業体験を希望する側である都市在住学生と、慢性的な労働力不足に悩む農家のそれぞれの農業体験プログラムに対する要望を明らかにし、支援体制に継続性を持たせるために必要な条件を明確にすることを目指している。

3. 方法

長野県中条村に農業体験実習に訪れる東京農工大1年生を対象に、二日間の農作業の様子を観察するとともに、実習に関する感想や農家への希望などを質問紙にて調査した。観察対象者は、2008年度生15名、2009年度生15名で、質問紙対象者は2009年度生15名である。また、受入れ農家6軒の夫妻12名に対しては実習の反省点や学生や役場への要望などを質問紙にて求め、個別訪問で聞き取り調査を実施した。

質問紙の内容は、農家に対しては、農業歴と栽培種、農業実習の内容と実習を受け入れた感想や要望、普段の農作業において使用する機械およびその危険性、農作業を手伝う人材の有無と農業ボランティア利用に関する希望などである。学生に対しては、これまでの農業とのかかわり方、今回の農業体験実習の内容と感想、過疎地域を見学しての感想、将来の職業選択と農業との関連などである。調査期間は2008年5月と2009年5月～9月である。

また、それとは別に、農大生ではない一般学生を対象に、農業体験に関する質問紙調査を実施した。被験者は長野県・山形県などの地域在住の学生34名と首都圏在住の学生10名、および社会人8名の計52名である。質問紙の内容は、農業体験の有無と感想、農業・農村へのイメージ、農業体験希望の有無と具体的作業や費用負担についてである。調査期間は2009年9月である。質問紙の配布は直接配布、回収は郵送にておこなった。

4. 結 果

4-1. 回答者の属性

2009年度に体験実習を受入れた長野県中条村の農家6軒・12名を対象に質問紙調査を実施し、農家4軒・8名（平均年齢65.6歳）から回答を得た。専業農家7名、兼業農家1名で、専業農業暦は平均12.5年である。家族構成は、回答者の親世代との同居が主なもので、日常的な農作業は回答した夫妻が中心に行っている。田植えや稲刈り、りんごの摘果など短期間に作業が必要な時に作業補助者を得ている農家は3軒、人を頼まず自分達だけで実施している農家が1軒であった。作業補助者は、自分の兄弟（姉妹）、子供家族が中心であり、近隣者が一例あった。

農業実習に訪れた東京農工大1年生15名を対象に質問紙調査を実施し、6名（平均年齢18.5歳）から回答を得た。また、これとは別に、一般大学生として早稲田大学の研修会に参加した関東および山形県・長野県の学生を中心に、農業体験に関する質問紙調査を実施し、52名（平均年齢22.8歳）から回答を得た。男女別の各人数を表1に示す。

表1. 対象者の属性

	男性		女性		全体 計
	学生	社会人	学生	社会人	
中条村農家	0	4	0	4	8
東京農工大	3	0	12	0	15
早稲田大学	6	6	38	2	52
計	9	10	50	6	75

農業体験実習を行う学生と受け入れ農家からの実習に関する評価を質問紙により収集することで、支援体制としての妥当性や改善が求められる部分について調査した。

4-2. 農業体験実習における農家の要望

中山間地域で比較的規模の大きい農業経営をする農家のうち、専業農家5軒、兼業農家1軒が2009年5月に1泊2日で農業実習を受け入れ、村内の道

の駅に到着した農大生を自家用車で迎えに行った。作業内容は各農家に任されていたため、田植えや苗の植えなおしをしたり、田植えの終わった苗箱や機械の洗浄作業、ピーマンの苗300本を定植して支柱を立てる作業、りんごの摘果作業、有機農家では土作りや肥料散布などを実施した。また、前年度は村内の宿泊施設を利用したが農作業時間が短くなるなどの理由で、今年度は各農家に宿泊することになった。残念ながら実習期間中は小雨が断続的に降っていたため、雨天でもできるハウス内の野菜の支柱立てを行った農家の他は、摘果作業など上を向くような農作業の本格実施は難しく、郷土食の「おやき」を学生が手作りして楽しめるように配慮した農家もあった。

今回の体験で訪れた農大生の仕事ぶりに関して、「作業の指示をすぐに理解でき農作業が捗る」、「農業や花卉について熱心に学習した」、「農業に関心があり、悪天候でもまじめに作業した」など、農家はとても高い評価を与えており、この体験実習を継続事業とすることを望んでいる人がほとんどであった。ただ一部の人に、「この事業の目的が不明瞭で、どこまで仕事をさせていいか迷う」などの意見も見られた。

宿泊は農家に依頼し、到着から出発まですべてその農家に滞在するスタイルをとったため、学生が手伝ってはくれたが食事の準備が大変であったという感想もある。ただ、女子学生たちが食事の準備と一緒にしたり、食事中にコミュニケーションがとれるなど良い面も認めている。

実習期間については、1泊2日では短すぎるという指摘もあり、せめて2泊3日が良いのではという意見もある。

実習受け機関としての村役場への要望としては、「受入れ時期は農家と相談して決めてほしい」、「受入れ時期の早期の連絡がほしい」などが挙げられる。農業ボランティアを希望しているのは回答農家4軒のうち半分の2軒でその内容としては、稲刈り・脱穀、ジャガ芋掘り、玉ねぎの収穫、りんごの摘果、草取りを挙げている。いずれも短期間に作業が集中する作業が多く、自身の子供や兄弟親戚を応援に頼んでいるが、それ以上に人手を必要としている。

4-3. 農業体験実習における農大生の要望

対象となる農大生は1年生で、それまでの居住環境との関係で農業体験をしたことのある学生は少なく、自然環境や食糧問題に関心を持つ傾向がある。

また中山間地域という場所を実際に訪問するのも初めてのことで、農家に民泊することも初めての体験であることから、実習前に感じていた不安感としては、トイレ設備の違い、農家の人とのつきあい方などを挙げている。

体験で実施する農作業は各農家に任されており、田植えの時期だったことから小雨の中でも手植えを体験したり、りんご農家では傾斜地での摘果作業をしたり、野菜出荷農家ではピーマンの苗を植えたり、有機農家では土作りの方法を教わったりした。

これに対する学生の感想は、「手作業の実態が理解できた」、「専業農家として生計を立てている方の話が直接聞けた」、「過疎地域の現状が見れた」、「郷土料理が美味しかった」、「豊かな自然を見れたこと」などを良い点として挙げている。一方、良くなかった点としては、「天気悪く仕事ができなかった」、「自分の勉強不足で農業に関する専門的な質問や意見が言えない」、「裕福な農家だったので過疎地の闇の部分が見られなかった」、「食事が物足りなかった」などが挙げられる。

過疎地域の活性化に必要なこととしては、「人がいなければ始まらないので都会から田舎へ人を誘致する」、「まずは農業のよこびを多くの人や子供に伝える」、「若い人が求める便利さを備える」、「農業体験や郷土料理教室などで観光客を呼ぶ」、「農業の魅力や自分で育てた安心な野菜を食べられる安心感を都市の人々に伝える」、「排他的な部分を感じたので、他地域から来る農家志望者を歓迎する体制が必要である」という意見であった。

農業体験に関する自由意見を求めたところ、「実際の体験が大事なので多くの人に機会を与える」、「目で見て人と触れ合う実習は大切な経験になった。実習機会をより多くの人に与えてほしい」、「気軽なスタディツアーで、田植えと稲刈りの2回行くと自分の植えた苗が実って達成感があるし人手不足の解消にもなる」、「研修ではなく楽しみ優先で農業体験をさせる」、「農家で体験ツアーを計画する。HPで農家の生活を紹介する」、「農家にとってあたりま

えのことが自分達には新鮮なのでパンフレットや農業体験を多く用意してほしい」など気軽に参加できる体験ツアーの重要性を示した。また、「ネットや学校で情報を出すと若い人は行きやすい」という回答も見られた。

農家へ期待することとしては、「実習の目的を事前に農家の方に理解しておいてほしい」、「ありのままの農家の姿を見せてほしい」、「過疎地の荒地の視察など実状を見たい」、「農業体験で楽しんで終わったのが残念。一度きりではなく継続的な関わりを持ちたい」など、農業に高い関心を持つ学生らしい意見が多々見られた。

4-4. 農大生以外の一般大学生の要望

早稲田大学が長野県内で開催した夏季研修会にて、参加者を対象に農業体験に関する質問紙調査を実施した。回答者は長野県・山形県などの地域在住の学生34名と首都圏在住の学生10名の計44名（平均年齢20.2歳）の学生と25歳以上の社会人8名（平均年齢37.4歳）である。

主な質問項目は、過去の農業体験の有無と感想、農業・農村へのイメージ、農業体験希望の有無と具体的作業や費用負担についてである。

なお、社会人の数が少ないので結果の分析は大学生を中心におこなっているが、質問項目によっては社会人の意見が参考になるので、関連する項目のみ適宜記載している。

① 農業体験の有無

学生44名、社会人8名について、過去の農業体験の有無を表2に示す。学生で農業体験があるのは37名（84%）、なしは7名（16%）であり、社会人と比べてかなり高い割合で経験がある。

表2 農業体験の有無

農業体験	あ	る	な	い
学 生		37		7
社 会 人		5		3

農業体験の内容としては、田植えや稲刈りが多く、ほとんどが小・中学生の間に体験している。また野菜の栽培や収穫も多く、これも小・中学生時の体験

がほとんどであるが、中には現在まで体験が続いている人も数名いる。その他の体験としてはりんごの摘果や花卉の手入れなども数名ある。表3は体験内容（複数回答）を示している。

表3 農業体験の内容（複数回答）

体験内容	学 生	社会人
田植え・稲刈り	27	3
野菜栽培・収穫	24	5
果樹・きのこ・花	3	1

農業体験のある37名の学生で、「楽しかった」が35%、「収穫の楽しみがあった」が24%など肯定的な感想を持つものが70%、反対に「疲れた」「虫が嫌いだった」など否定的な感想を持つものが30%という結果になった。表4に農業体験の感想を示す。

表4 農業体験の感想

体験の感想	学 生 (37名)	社会人 (5名)
楽しかった	13 (35%)	1 (20%)
収穫の楽しみ	9 (24%)	3 (60%)
勉強になる	4 (11%)	0 (0%)
疲 れ た	10 (27%)	1 (20%)
虫 が 嫌 い	1 (3%)	0 (0%)

今後の農業体験の希望については、「希望する」が17名、「いつか機会があったらする」が20名、「希望しない」が15名で、農業体験を希望するものは過去の経験と関係なく学生が多い結果となった。社会人は回答数が少ないが、農業体験を希望する人の割合が減るので、学生を対象とした体験プログラムの開発が効果的と考えられる。表5は今後の農業体験に関する希望の有無を、過去の体験別に示している。

表5 今後の農業体験希望の有無

過去の農業体験	希望する	いつか	希望せず
経験者(学生)	13	15	9
未経験者(学生)	3	2	2
経験者(社会人)	1	0	4
未経験者(社会人)	0	3	0
計	17	20	15

② 農業体験希望者が求める作業内容等

大学生が希望する作業内容としては、野菜や果樹の収穫が多く、田植えや脱穀を希望する人は極めて少ない。一方、農家が考える農業体験メニューとして、まず挙げられるのが田植えと稲刈りであるが、体験を希望する側にとってはあまり望む作業であるとは言い難い結果となった。田植えや稲刈りは幼い頃に経験することも多く、その時の疲労感を覚えているためか、あるいは、別の農作業も体験してみたいと思うためか、今後農業体験をする際には野菜や果樹の収穫に興味を示す者が多い。農業体験を希望しない学生9名中7名が小学生低学年の頃に体験した田植えや稲刈りが暑くて疲れて大変だったという感想を持っている。表6に希望する農作業を示す。

表6 希望する農作業（複数回答）

農業体験	要求度	野菜 収穫	果樹 収穫	何で も	播種 定植	田植 脱穀	他
経験者	積極的	4	6	3	3	2	1
	いつか	6	6	3	0	0	2
未経験者	積極的	2	1	1	3	0	0
	いつか	1	0	1	1	1	1
計		13	13	8	7	3	4

農業体験を希望する人は、これまでに農業体験をしたことのある者28名と未経験の者5名の計33名であり、希望する体験スタイルについて回答を得られたのは24名で、詳細は表7に示すとおり、「農家に任せる」が11名(45.8%)と多いが、体験を積極的に希望する人では「観光とセットにする」を選んだ者が多い。

表7 希望する農業体験スタイル

農業体験	要求度	農家 任せ	観光 セット	作業 選択	他
経験者	積極的	3	5	2	0
	いつか	7	0	2	1
未経験者	積極的	1	1	0	0
	いつか	0	1	1	0
計		11	7	5	1

5. 考 察

農業後継者がいないという現実、自分が辞めたら農地が短時間で荒廃地になり周囲の田畑の所有者へ迷惑がかかることが分かっているために⁴⁾、中山間地域の高齢者には、誰でもいいから農村へ来て耕作してくれる人が現れないかという期待感がある。行政として新規就農者の確保に取り組む市町村もあるが、機械化が難しい中山間地域では耕作条件が厳しく、人材確保は困難である。

近年注目され始めた農業ボランティアは、農家として生計をたてることを躊躇する人にも農業への関心を持つ人々がいることを利用した、気軽な農業体験の機会提供であり、都市在住者が抱く農業への関心を実際の農作業へ具現化できるようにすることは、人手不足に悩む農家にとって、期待感の大きいシステムと言える。

ただし、農業ボランティア制度の多くが、交通費や賃金の支給は考慮していないため、農家が求める援農人材として定着するまでにはかなりの試行錯誤が必要と思われる。

東京農工大のような農業体験実習では、授業の一環であることから授業単位になったり、中山間地域活性化の試みとして費用の一部を村が負担することで継続性を持たせることができた。しかし、一般ボランティアの確保に結び付けるためには、学生とは異なる参加理由や要望についても明らかにする必要があり、その手がかりとして農大生による体験学習から抽出した問題点などを改善していく必要がある。

今回の実習後の質問紙調査や聞き取り調査で得られた結果から、農家と参加学生の要望の違い、及びそれらの調整の必要性について以下に考えを示す。

5-1. 農家の支援体制に対する要望

① 農家にとって必要な人材

農大生に関しては、従来受け入れてきた小中学生の体験と異なり、農業分野に関心のある大学生ということで、作業の指示や説明をすばやく理解し的確な作業をできることが好評であった。また実習期間中はあいにくの小雨であったが、雨具を着て靴を泥だらけにしながらいながら真面目に作業する姿は、農家からは雨の中の作業で気の毒だったが、農作業だけでな

くいろいろな体験をしにまた来てほしいという評価になったと思われる。ただし、東京農工大と中条村との距離が離れすぎているために、再度作業を手伝いに行きたいと思っている学生がいても、時間や費用の問題がクリアできず、ほとんどが実施までに至っていないのが現状である。

また、体験に来た学生と個人的に交流を始める農家もあり、秋の収穫作業への参加案内をするなど、継続的な交流場面が見られるのは、宿泊や食事を何度も一緒にすることで親近感が増す効果があったとも考えられる。

② 実施時期の決定

実習期間に関しては、昨年度同様、週末を利用した学外授業ということで1泊2日が限度であったが、受け入れ農家としては1泊2日では短すぎるという指摘もあり、できれば2泊3日の望む声もあった。まず、東京を朝7時に出発して高速バスと村の送迎マイクロバスを利用しても到着が12時という距離は、せっかく遠くから来たのだからという思いがある。さらに農作業の補助者として期待できる人材と認めていることから、来年度以降もぜひ継続事業にしてほしいという意見が多い。

また、実習日程が事前に決まっているため天候が悪くても実施せざるを得ないことから、雨で農作業ができなかった時間が多く発生しており、当日の朝の天気を見てその日の作業を決定できる距離内に農業支援者を確保することの必要性が高いと言える。

③ 農作業以外の意義

農作業以外の面としては、農村には数少ない「若者」との交流を楽しみにして農業体験を受入れている農家もいる。それは、自分自身が農業と向き合っている生活していることで得られた感動や農村に残っている美しい自然や人情などを、若い人に伝えたいという思いから発生している。今回の農業体験受け入れでは、宿泊が伴ったため、食事の準備が大変だったという感想も持ちつつ、若い人たちと食事をしながらゆっくり話ができることが良かったとする意見が多かった。

小雨の中、雨合羽を着て圃場へ繰り出した農家もあるが、りんごの摘果作業など、上を向く作業が雨

の中では不可能なことから、持て余した時間を利用して、郷土食のおやき作りを学生と一緒にした農家もあり、こうした料理や食事を一緒に楽しめたことに、農家の女性から良い評価を与えられている。

④ 体験スタイル

昨年度は、村内の宿泊施設を利用して、農作業の時間のみ農家へ訪問するスタイルだったが、今年度は宿泊も農家に依頼し、到着から出発まですべてその農家に滞在するスタイルをとった。それにより、時間を気にせず農家の都合で仕事ができただけの反面、食事の支度や寝具の新調が大変であったという意見もある。

一方、農業ボランティアの受入れを希望する農家にとっては、農作業の忙しい時期に食事の準備に時間を割かれるのは非常に敬遠されることなので、宿泊を伴わない方法をとるか、宿泊を伴ったとしても家事作業の軽減化は重要である。

特に学生をいわゆる「お客さん」扱いすることが一定の礼節となっている農家においては、日常範囲を超える家事の発生が労力の増大につながる。従って日常生活を共に過ごす「家族」としての行動形式を取ることで負担の発生を少なく抑えられるが、そのためには充分な趣旨の理解が双方に必要である。

5-2. 学生の体験学習に対する要望

① 不安や心配・居住環境の違い

都市部の学生にとって過疎地域の農家へのイメージは、たとえばトイレ環境が日常と異なることを心配する例があったように、相当に古い家屋のイメージを持っていることが分かる。確かに農村にはそのような住居も残ってはいるが、今回の実習を受け入れた農家は、比較的裕福な農家でもあったことから、いわゆる古い農家のイメージとは異なり、現代建築物に改築してあったり、外観は昔ながらの風格を保ちながら内部を改造したり衛生設備などの仕様も都市部に劣ることはなかった。これまでも小中学生の農業体験を受け入れてきたこともあり、設備面などで不快な思いをさせないように配慮されていたので、学生の心配は不要になった。ただ、一般的には設備面での戸惑いが生じるような農家もないわけではないので、その場合は異文化体験を楽しむような気持

ちで対応できるとよいと思われる。

② 人間関係への不安

それ以外に心配なこととしては、宿泊体験の場合は、受け入れ先農家での滞在時間が日帰り体験に比べて長くなるために、農家の人と馴染めるかと気にしていることも挙げられる。体験実施後の学生の感想からは受入れ農家で対人関係やコミュニケーションで困ったという記述はなかったが、学生自身が1年生ということで農業に関する知識が少ないことを自覚しており、農家の人との専門的な話題があまりできなかったことを残念に感じた人もいた。従って農家とのコミュニケーションを前提とした事前の学習が必要であることが示唆されたと言える。

③ その他

宿泊した女子学生たちは食事の準備を一緒にするなど、農家に負担をかけないような配慮もしていたが、普段の食生活と趣が異なる農家の食事内容に対して「肉が出なかった」と素直な感想を記した男子学生もおり、農業体験だけでなく農村の食文化にも触れる一端になったことと思う。

5-3. 一般大学生による農業体験の可能性

農業ボランティアとしての人材は、人手不足に悩む農村部よりも、食の安全性や鮮度などに関心を持つ人が多い都市部に得られやすいと考えられる。都市在住者の中でも、地方都市と首都圏とでは、その人の成長過程で関わった農業体験機会の頻度や農業に対する心象も若干異なるが、⁵⁾ どちらにも農業ボランティアへの関心を示す学生がいるので、そういった学生が気軽に参加できるシステム作りの実現が望ましい。

一般学生への質問紙の回答結果からは、小中学生の頃に農業体験をしたことにより、暑い時期の農作業は大変だったと覚えている反面、土を触った感触が楽しかったとか、収穫したときはとても喜しかったなど、農業を肯定的に捉えている人が多い。その人たちの中には今後も農業体験をしてみたいという希望を持つ者も多いので、農家側からの情報発信が不足している状態を改善することにより、農家が希望する人材を確保することは可能と考えられる。

東京農工大の農業体験のように授業としての参加スタイルをとると、事前の打合せや手配などは大学側で行うので学生は安心して参加できるが、一般学生が体験に参加しようとする場合は、情報収集や農家との連絡などを個人でも必要であり、遠距離の場合は交通費や宿泊費が大きな負担となる。この交通費と宿泊費の負担を解消するスタイルとして考えられているのが、観光と農業をセットにしたツアーと言える。これまでもぶどうやイチゴなどを摘み取ってその場で食べる観光農園はあったが、滞在型宿泊施設の周辺農家と提携して、とうもろこしを収穫する農業体験ツアーなども出現するなど、農家による試行錯誤が始まっている。

これは季節や場所が異なればいろいろな農作業が体験でき、参加者の希望で作業内容が選択可能な点が気安く農作業に参加できるようにしているものである。しかも宿泊・交通費は参加者負担であるので、農家としては作業期間が短期間に限定しているもの以外は利用可能である。一般学生で農業体験を望む人の中にもこの観光とセットにした農業体験ツアースタイルを希望する人が多かった。

中条村においても、野沢菜採りツアー、梅採りツアーなどは近隣市街地からの参加者を得てこれまでも盛況であったが、農家が人手を要するじゃが芋掘りや玉ねぎの収穫作業なども、収穫時期の情報提供を適宜行うことで作業者を確保することは可能と思われる。

観光とセットにした農業体験は近年出現したスタイルで、その認識度も高くはないと思われるが、情報提供をすることにより参加希望者を効果的に集める方法の一つである。

5-4.農家と学生のニーズ調整の必要性

昨年度に引き続き農大生の体験を受入れた農家は4軒で、あとの2軒は今年度からの受入れであった。このうちの1軒から「この農業体験の目的が不明瞭である」という意見が出ている。また2年続けて受入れた農家のうちの1軒は、他の農家と異なり、これまで数多くの就農希望者を長期の宿泊を伴って受入れ、農業の基礎をしっかりと教えていたこともあって、ここで体験をした学生から「農家と学生が期待していることにズレがある気がする」という指摘が

あった。これらのことから、受入れ農家と体験希望者の要望を事前に詳細に拾ってマッチングさせる必要があることが分かる。役場の担当者は農家の事情はよく理解していたのだが、学生の要望を聞き取る機会がなかったために、担当者自身の過去の農業体験を参考にして「男子学生だから、きつい仕事も大丈夫だろう」という考えで受入れ農家を決めたことも mismatch を招いたのかもしれない。大学側としては体験を受入れて「いただく」立場であるために、仮りに学生の要望があっても農家や役場へ伝えるのを控えようという意思が働くこともある。

また、農大生にとっては普段目にするものがない過疎地域や中山間地域の農業現場を見に来ることが目的で中条村での実習を行っているのだが、受入れ農家側には「どこまで作業をやらせていいかわからない」とか、学生からも「お客様扱いをしないで、過疎地の実態をもっと見せて欲しかった」という意見に見られるように、お互いの希望を出し合うことに遠慮があり、実習機会を最大限に利用できていないことが分かった。今回、事後ではあるが質問紙調査を行ったことで農家と学生のニーズを知ることができたので、できれば事前に双方のニーズの擦り合わせをする機会を持つことが大事だと考えられる。

5-5.一般参加者のニーズ

一般参加者の場合は、農大生よりも農作業以外の面での要求も高くなると考えられ、農作業の面白さ以外にも、地域の珍しい食事や美しい景色などに価値観を持つ人の割合が高くなると考えられる。また、そういう要望を把握することで、農業ボランティアのリピーターを確保しやすくなると思われる。参加者にとっては、普段したことのない農作業で身体を酷使したあとの美味しい食事や、田園風景の中でおやつを食べる体験などは、ぜひまた農業ボランティアに来たいという思いに繋がってくる。農家との距離が近いほど、それは実現しやすく、農村近郊の市街地から農業ボランティアを確保できることが継続条件の一つであると言える。

大学の授業としての農業体験と異なり、一般の大学生や社会人が農業ボランティアに参加しようと思うときに、ボランティアを希望している農家の情報が必要である。いつ、どこで、どんな作業を必要と

しているのかという情報を入手しやすくすることは、援農人材確保にとって有効である。そこで、農業ボランティアを募集している中条村の専業農家において、自宅農園で採れる野菜や作業の様子をインターネットを利用したブログで紹介しながらボランティアの募集を実施したところ、地元の学生が関心を示し、複数回参加する学生も現れてきた。体験者の感想としては「普段やったことのない作業で疲れたが、美味しいものを食べたいからまた参加したい」、「農家の人の性格や気持ちが、楽しい・おもしろいからまた参加したい」、「農村の景色は落ち着くし、時間にとらわれない生き方が羨ましいから、ここで住みたい」など、農作業そのものよりは農村の暮らしや食文化に興味を強く示していることがわかり、その魅力をさらに増しているのが、農家の人柄であることも示唆されたと言える。

さらには、一般社会人による農業ボランティアの増加を期待したいところであるが、都市と農村との関わりは、食料の需給にとどまらず、近年は農業体験や農業実習など実務的な内容から、休日は田舎でのんびり過ごしたいというようなものまで、農村が期待される役割が多様化している。例えば上田市郊外にある稲倉の棚田は平成11年度の棚田百選に選ばれたあと、棚田オーナー制度を導入して、現在は県外の30軒ほどのオーナーと契約して田植えと稲刈りの作業を共同で実施している。一度は樹木も茂るほどの荒廃地になったものを住民の努力と行政による支援で地域として棚田を復活させたのである。今年3回の草刈りは住民50軒の協力を得て実施し、美しい景観を保つ努力を続けている。

長野県中条村でも同じく棚田オーナー制度を導入し、県内外から農作業に招いているが、棚田の維持管理に努める農家の高齢化や、オーナー自身の高齢化などにより、継続することが困難になりつつあるのも事実である。棚田の管理は誰もができる簡単な作業ではないし、畦の草刈り作業のひとつをとっても、手間のかかる仕事である。効率の面から考えれば、棚田よりも圃場整備をして機械化農業を目指すほうがいいのだが、都市在住者にとっては、昔の田園風景を思わせる棚田の方が情緒的であるし、のんびりと土とかかわる手作業の方が精神的な安らぎが得られるなど魅力的であるといえる。

農家が持っている要望と、労働力として期待される人材である「一般体験希望者」・「農業大学生」・「就農希望者」の要望を、農業体験によって引き出し、それらをマッチングするコーディネータの役割を示したものが図1である。

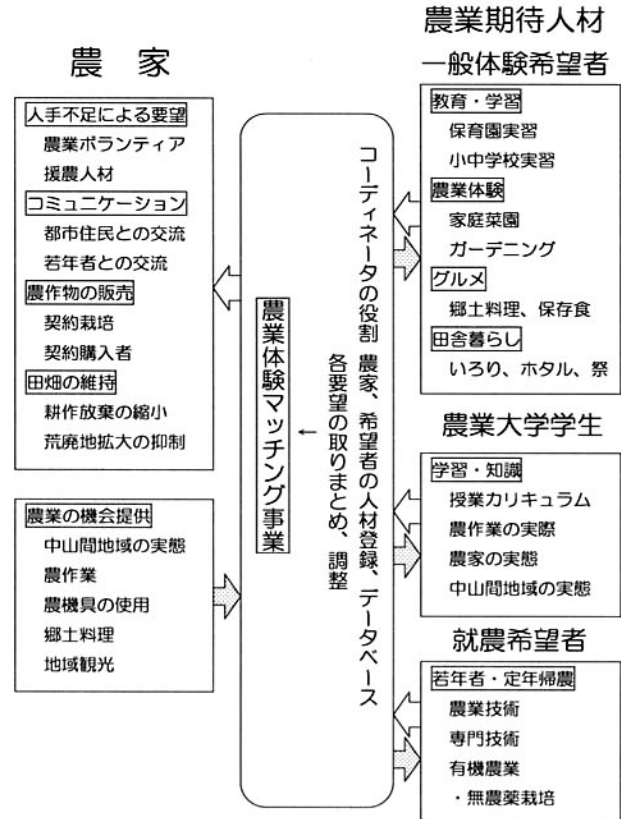


図1. 農業体験に関するコーディネータの役割

6. まとめ

高齢化による農業の人手不足を補う方法として、機械化による効率向上も重要であるが、機械化が困難な中山間地域においては農業ボランティア等による援農人材の導入も不可欠である。農業ボランティアを希望する農家の要望は、農作業を支援できる人材確保の他にも、都市住民とのコミュニケーションや、農作物の販路拡大など多様化している。一方、農業体験などで農家に訪れる一般希望者や学生などの要望は、学校での授業としての参加や、家庭菜園に役立てるためとか、田舎の雰囲気が好きだからなど、こちら側も多様化していることが明らかになった。しかし、農業体験を受入れる農家にとっては、農作業を手伝う人材として一括りにしやすく、体験内容も農家の都合で提供しているのが一般的である。

そのため、実際の体験実習に入ってから、農家と参加者との要望がずれていることが判る場合もあり、事前の調整や・事後の要望のとりまとめをするコーディネータの役割が重要になってくる。受入れ農家の負担となりやすい宿泊や食事の提供についても、村内の宿泊施設を利用して農作業だけを受入れたいと思う農家と、宿泊を伴っても交流の意味を大事にして、その後の継続的な付き合いまで発展させたいと思う農家と様々であり、同一農家でも季節や作業によって希望が変化していくことも考えられるので、柔軟に対応できるような調整をする必要がある。

農業体験やボランティア参加者にとって、農家までの交通や農作業の内容、報酬の有無などの基本情報の他にも、農家の人柄や衛生設備など詳細な情報を必要としている場合もあり、それらの情報が入手しやすいシステムを作ることで、人材が確保しやすくなる。

農工大の実習のように大学と役場が学生と農家の間に入る場合は、大勢の人材を受け入れることが可能な反面、天候や宿泊日数などで農家の要望に応えられない場合も発生する。そのため、農家が個別に情報発信を行って、必要な時に必要な人材を確保できるようにする努力も必要である。ブログやホームページを利用した情報発信も効果的であるが、それを提供できる環境を持つ農家は少ないので、PC技術に関する支援も続ける必要がある。⁶⁾

子供の頃に農業体験をした経験を持つ者は多く、大学生を対象とした調査では、今後農業体験の機会があれば参加を希望するという者は少なくない。暑さの中の農作業は疲れるが、土いじりの楽しさや収穫の喜びが得られるなど、農業を肯定的にとらえている学生を、人材を必要としている農業分野へ配置することができれば、農業の活性化が可能になる。

そのためには、学生が農業体験をしようとする際に必要とする情報を提供することと、農業ボランティアを求めている農家側の要望を明らかにする必要がある。それらをマッチングさせるシステムを提案することで、若い援農者が得られやすくなる。

自然環境を利用して人間にとって必要な食料や生活物資を提供する農林業は、人間の営みに欠くことのできない重要な産業である。⁷⁾ 農業体験やボランティアによって、それまで無縁であった農業に触

れる機会を都市住民に提供し、食や農業への関心を高めたり、都市と農村との自発的な人的交流にも寄与する効果も得られると考えられる。

週末、それまで見ることのなかった農村に、農作業を手伝う学生の姿が増えることで、高齢化する農村に「元気」が戻ってくることを可能にすることができればと願っている。

謝 辞

本研究は平成 21 年度文部科学省科学研究費による。記して感謝の意を示す。

また調査にあたっては中条村、東京農工大、早稲田大学の皆様の協力を頂いたことにも感謝の意を記すとともに、中山間地域の荒廃化を食い止めようと日々農作業に取り組んでいる中条村の農家の皆様にも深く敬意を示したい。

参 考 文 献

- 1) 農林水産省 食料・農業・農村白書 平成 19 年版、2007
- 2) 下平佳江、農業労働、産業・組織心理学ハンドブック、392-395、丸善、2009
- 3) 静岡市援農ボランティア事業、日本経済新聞 2008.1.25
- 4) 下平佳江、高齢化先進地域における農業の活性化への挑戦、岸田孝弥監修 実践産業・組織心理学、第 2 章、20-33、創成社、2007
- 5) 下平佳江、加藤麻樹、過疎地域の農業や高齢者に関する都市在住者と地域在住者の心象の違い、長野県短期大学紀要、第 63 号、45-52、2008
- 6) 下平佳江・加藤麻樹、過疎地域の高齢者の継続的な PC 利用に対する支援の検討、長野県短期大学紀要、第 61 号、115-126、2006
- 7) 唐澤豊編、食と緑の環境科学、信濃毎日新聞社、2008